
主を失ったテニスラケット

空き缶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

主を失ったテニスラケット

【Nコード】

N5387E

【作者名】

空き缶

【あらすじ】

昔握られていたラケットは、何も見ず。ただ孤独のときをすごしていた。

部活の引退式。

三年の先輩が泣きながら最後の練習をしていた。

泣いた先輩はいなくなり、誰もが泣かずにもくもくと練習に励む。残されたのは青のラインが入った、三年間丁寧に使われてきた、主を失ったテニスラケット。

ラケットは見ていた。三年間。

そしてこれからどうなるのかも知っていた。

想像通り、ラケットは捨てられた。それなりにラケットとしての役割を果たしていた。

そんなことは関係ない。

古いものはただ去るのみ。

ラケットは暗闇にいた。

植物の中で埋もれていた。

何も見ず、音だけが聞こえていた。

一体どれくらいがたったのだろうか？

それすら分からない。

グリップが外に出ているのは知っていたけど。だからといって何ができるわけでもない。

声が聞こえた。聞いたことのないような高く、鈴を鳴らすような声だった。

「先輩！ 何でこれ捨てられてるんですか？」

「さあ？ よく分からないな」

「もつたいない……。これらっていいですか？」

「いいよ。どうせ誰も使ってないし。でも、そんなぼろいもんでい

いの？」

「いいんです！」

ラケットは引き抜かれた。握られた感じが初心者だった。

光を得たラケットは歓喜の叫びと悲しみの声を上げた。

久しぶりに見た景色は、昔インターハイで握られていたときと変わらず、青く青く澄んだ空だった。

この少女もすぐ、このラケットとお別れするのだろう。それまで、ラケットはラケットであろうとするだろう。

再び主を失うときまで。

(後書き)

なんとなく部活の風景を見ていたら思いついた話です。

至らない点が多々あるでしょうし、むしろだめだめだと思いますが、読んでいただきありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5387e/>

主を失ったテニスラケット

2010年10月28日09時28分発行